

ろうさい ニュース

令和3年

7月号

第443号

ロゴマークが新しくなりました！



(R3年6月開設 新健診部)

着任のごあいさつ

総合内科部長 岩本 達治

はじめまして、7月から浜松労災病院内科に勤務することになりました岩本達治と申します。

高校までを静岡市で過ごし、1991年に自治医科大学を卒業しました。静岡県立総合病院で初期研修後、市立島田市民病院、国民健康保険佐久間病院、公立森町病院で総合内科医として地域医療に携わって来ました。

病院所属の総合内科医には二つの役割があると思っています。一つは外来で内科全般を診療すること、もう一つはホスピタリストとしての役割です。

ホスピタリストとはまだ十分に定着していない言葉ですが、最近は病院総合医と訳されることが多い、入院患者さんの内科管理に幅広く関わっていく仕事です。

外来、入院ともに労災病院内の各専門科の先生方はもちろん、院外の先生方とも連携し良い医療を提供していきたいと考えています。

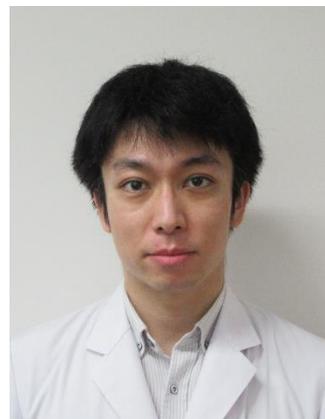
新しい環境の中で至らぬ点もあろうかと思いますが、よろしく願いいたします。



着任のごあいさつ

消化器内科医師 熊谷 健

令和3年7月より消化器内科医師として赴任することになりました。
熊谷健と申します。卒後13年目となります。私は兵庫県神戸市出身で、京都大学を卒業後、岡山の倉敷中央病院で2年間の初期研修のうち、同院の放射線診断科で1年間読影およびAngio業務に従事しました。医師4年目で消化器内科医に転向し、国立病院機構京都医療センターを経て京都大学大学院に入学し、胃癌に関連する研究を行っていました。今年6月までは医員として京都大学で勤務しておりましたが、このたび荒木理医師と交代する形で浜松労災病院に赴任いたしました。



得意分野はESDを中心とした内視鏡治療およびCT/MRIなどの画像診断です。なるべく苦痛の少ない内視鏡、見逃しのない内視鏡を心がけております。よろしくお願いいたします。

診療科の紹介（婦人科）

婦人科部長 小澤 英親

■対象疾患

子宮筋腫、子宮内膜症、卵巣腫瘍、子宮癌(子宮頸癌、子宮体癌)、卵巣癌、子宮頸管ポリープ、子宮内膜ポリープ、膣炎、更年期障害、月経不順など。



大変お世話になっております。当院の婦人科を紹介させていただきます。

婦人科は、上述のように、女性生殖器（子宮、卵巣、膣等）の疾患や女性のホルモン異常（月経の異常、更年期や思春期）等を対象としています。

さて、当科はしばらくの間、常勤医師不在でしたが、平成23年度から常勤医師1名体制となり、はや10年が経過しました。この間、腹腔鏡手術や子宮鏡手術を導入し、またコルポスコープ下の子宮腔部生検を積極的に行っておりますので、卵巣嚢腫や子宮頸部異形成等の症例をご紹介いただければ幸甚です。また、子宮頸癌ワクチンも接種可能です。

常勤医師1名のため、侵襲の強い治療は行えませんが、引き続き向上心をもって努めてまいります。

一日も早くコロナ禍が収束して日常を取り戻せるように願っております。今後ともよろしくお願いいたします。

診療科の紹介（皮膚科）

皮膚科部長 船井 尚子

先生方をはじめ関係者の皆様には日頃よりお世話になりありがとうございます。
皮膚科から、【進化しているアトピー性皮膚炎の治療】と、【この季節に増える足白癬(水虫)】について紹介させていただきます。

【アトピー性皮膚炎の治療（図1）】

アトピー性皮膚炎は単なるアレルギー疾患ではなく、その病態は、「免疫の異常」に加えて「皮膚のバリア機能異常」「痒み/搔破」の3つの要素が複雑に絡み合っていることがわかってきました。長い間、外用薬はステロイドやタクロリムス、内服薬は抗ヒスタミン薬とシクロスポリンが中心でしたが、病態が解明されてきた近年、アトピー性皮膚炎の治療は進化しています。

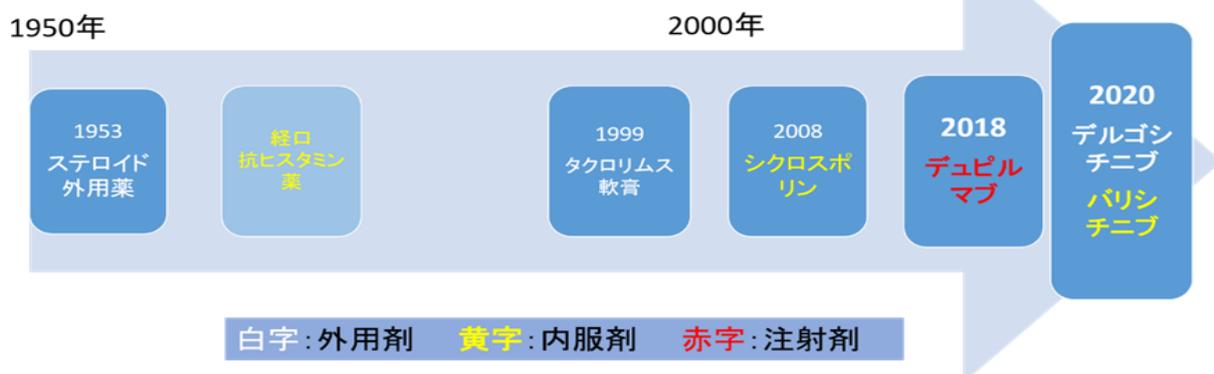
2018年に約10年ぶりの新薬として生物学的製剤デュピルマブ（デュピクセント®：ヒト型抗ヒトIL-4/13受容体モノクローナル抗体）が登場しました。現在、気管支喘息や鼻茸を伴う慢性副鼻腔炎にも適応があるこのお薬は、アトピー性皮膚炎の炎症に関わるサイトカインのうちIL-4、IL-13の働きを抑えることで皮膚症状を改善します。薬価が高く投薬に一定の条件がありますが、ピンポイントで抑制しますので副作用は少なく比較的安全で、中等症～重症のアトピー性皮膚炎に非常に有効な治療薬です。

2020年には約20年ぶりに外用薬の新薬としてJAK（ヤヌスキナーゼ）阻害薬デルゴシチニブ（コレクチム®軟膏）が世界で初めて登場、その後関節リウマチで適応のあった経口のJAK阻害薬バリシチニブ（オルミエント®）がアトピー性皮膚炎の内服薬として12年ぶりに適応となりました。ともに、アトピー性皮膚炎の悪化に関わるサイトカインのシグナル伝達に重要なJAK/STAT経路をブロックして、炎症やかゆみにつながる免疫反応を抑えることで皮膚の症状を改善します。外用薬のデルゴシチニブは、今年に入り小児用も登場したこれまでとは異なる機序の非ステロイド性の薬で、炎症を抑えるだけでなくバリア機能修復も期待できます。また、外用薬ですので、塗布部位に多少の刺激を感じる方もおりますが全身への副作用の懸念が少なく安全な薬と言えます。

まだ、この先も様々な薬剤が承認申請中であつたり開発されつつあります。アトピー性皮膚炎の治療の最終目標は「症状がないか、あつても軽微～軽度で、薬物療法もあまり必要としない状態に到達、もしくは日常生活に支障をきたすような急な悪化がおこらない状態を維持すること」とされています。少しでも目標に近づき達成できるよう、以前からの薬と新しい薬を組み合わせて個々の患者様にあつた治療を継続してまいります。

(図1)

【アトピー性皮膚炎の治療】



【水虫（足白癬）】

とても身近な水虫ですが、多くの患者さんは「かゆくなければ水虫ではない」「水虫は足・ゆびの間の皮がむけたりジュクジュクするもの」「水虫は治らない」「薬は症状のあるところに塗ればいい」など誤った認識を持たれている印象をうけます。加えて、見た目が類似した別の疾患を「水虫だ」と思い込んで市販薬を塗っている方もおられます。実際は、かゆくない水虫がありますし、趾間型だけでなく小水疱型（足底に小水疱ができる）や角化型（足底、特に踵の皮膚が厚く硬くなる）もあります。また、足底全体・趾間・足趾背面・足側面・踵周囲と広めに塗り続けることで完治が期待できます。

水虫は見ただけで診断をつけることはできず、確定診断には顕微鏡検査が不可欠です。検査をすればほとんどがその場で診断がつきますので、「水虫の検査を受けたことがない」「塗っているのによくない」方がおられましたら、皮膚科の受診をすすめていただければ嬉しく思います。その際、既に抗真菌剤外用中でしたら、正確に検査を行うために2週間程度塗り薬をやめて受診していただくようお声掛けいただけますとなお一層ありがたいです。

水虫はありふれた病気ですが、基礎疾患がある方では足切断や命取りになりえます。正確に診断・治療して、一人でも重篤な合併症をおこす患者さんが減ることに貢献できますよう、日々診療してまいります。

今後ともよろしく願いいたします。

独立行政法人 労働者健康安全機構 浜松ろうさい病院 地域医療連携室

受付時間 電話 053-411-0366 fax 053-411-0315

紹介患者の予約受付 月～金 8:15～18:00 土 8:15～12:00

